

令和 4 年 9 月 1 日現在

機関番号：13902
 研究種目：基盤研究(C)（一般）
 研究期間：2018～2021
 課題番号：18K00643
 研究課題名（和文）古英語における人称代名詞と指示代名詞の用法分析 theyの発達過程の解明に向けて

研究課題名（英文）Use and interchangeability of third-person and demonstrative pronouns in Old English: towards a better understanding of the development of they

研究代表者
 小塚 良孝 (Kozuka, Yoshitaka)
 愛知教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：40513982

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではtheyの由来を再考した。theyの起源については古ノルド語借入説が定説であるが内的発達（古英語の指示代名詞からの発達）の可能性も指摘されている。しかし、基礎研究の蓄積が少なく、その発達プロセスには不明な点が多い。そこで本研究では、theyの使用が本格化する前の古英語期における三人称代名詞と指示代名詞の使用状況（特に両者の交替可能性）を調査し、theyの発達プロセスを再考した。この調査から、北部方言のテキストで指示対象が複数形の場合に指示代名詞の使用率が高くなることや、北部方言以外でも指示対象が無生物の場合に指示代名詞の使用率が高くなることなど、theyの発達の萌芽が認められた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、まず第一に、これまで十分な蓄積がなかったtheyの発達に関わる古英語期の基礎データを収集・公表したことである。本研究で得たデータはtheyの起源や発達プロセスを今後考察する際に有用であると考えられる。また、本研究で、theyの発達は単に古ノルド語の影響によるのではなく、複雑なプロセスを経た可能性が指摘されたこと、また、中英語以降の格によるtheyの浸透速度の違いに対してより合理的な説明が与えられる可能性が指摘されたことなどは、多くの研究に資すると思われる。特に後者の点は中英語期以降の様々な言語状況の解明にもつながることであり英語史研究の発展に大きく寄与すると考える。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to reconsider the origin of they. It has traditionally been assumed that Modern English they has its origin in the Old Norse counterparts, which were borrowed or imposed as a result of intimate Anglo-Norse contact in the Danelaw. On the other hand, the possibility that the plural forms of Old English demonstrative se were the origin of they has been put forward mainly from phonological and morphological perspectives. No matter which of the two origins is considered, better understanding of the use of se is necessary to make more explicit the process of the development of they. Little, however, has been investigated on the details of the use of se and its interchangeability with the third-person pronoun. This research focused on the early stages of the development of they, especially looking at biblical interlinear glosses and translations, and gained several noteworthy results possibly leading to a better understanding of the development of they.

研究分野：英語史

キーワード：三人称代名詞 複数形 指示代名詞 古英語 行間注 有生性 方言 古ノルド語

1. 研究開始当初の背景

一般的には **they** 型は古ノルド語人称代名詞の借入だと考えられている。閉鎖類語彙の借入は異例だが、9世紀以降のデーノロー地域におけるアングロ・サクソン人とデーノ人の親密で長期に渡る共存とその間の言語接触 (e.g., Baugh and Cable, 2002)、そして、古英語人称代名詞のパラダイムが孕む同音異義衝突を回避したいという治療的動機 (therapeutic motivation) (e.g., Werner, 1991; Durkin, 2014) が背景にあると考えられている。

一方、借入という全く外的な要因のみではなく、古英語の指示代名詞の複数形 (**þa, þara, þam**) が **they** 型の発達に関わった可能性も指摘されている (e.g., Sweet, 1892; Ogura, 2001; 横田, 2012)。つまり、同音異義衝突回避のために意図的に、または、指示代名詞と三人称代名詞の両者の機能が似ているために無意識的に両者を混用し、北部ではこの混用が古ノルド語の影響で特に進み、形態的にも影響を受け、**they** 型の発達につながった、という考えである。古英語の指示代名詞の関与を支持する証拠として、後期ウェスト・サクソン方言には、**þa** の強調形として **þæge** という **they** を想起させる語形が数例報告されている (Förster, 1941, 1942; Ogura, 2001)。

その後の発達に目を向けると、古英語末期または初期中英語期に北部方言で始まった **they** 型は徐々に南下し、16世紀初めまでに従来の **h**-型に取って代わる。そのプロセスに関する興味深い点として、**they** 型の浸透はかなりの時間を要しただけでなく、まずは主格形、次に属格形、最後に斜格形というように三段階 (three phases) を経たことが指摘されている (Lass 1992, 2006)。

なぜ主格からかということについては様々な見解があるが、一般的には、主格形とそれを受け取る動詞の屈折の双方で単純化が進んだことにより単複の区別が難しくなったからだと考えられている (Werner, 1991; Howe, 1996; Durkin, 2014)。また、主格の新しい形態が他の格に影響を及ぼして類推で広がったのか、いずれも借入されたが浸透度に差があっただけなのかということについてもたびたび議論される (Werner, 1991; Howe, 1996)。

このように、英語史において大きな変化の一つである **they** 型の発達過程に関しては様々な可能性や不明な点が指摘されているものの、意外にも実証的な研究は十分に積み重ねられておらず、やや古い Ritt (2003) の以下の言葉にあるように、その実態はまだよくわかっていない。

While missing from no major handbook, however, the story how Scandinavian pronouns found their way into English has not been subject to as many detailed and systematic treatments as one would expect. (Ritt, 2003, 280)

とりわけ、発達の最初期である古英語期の状況については特にデータ不足で、その実態は特に不明である。

以上のような背景から、**they** 型の発達過程の解明にはまずは基礎データの蓄積が必要で、特に、後期古英語期の人称代名詞と指示代名詞の使用の状況を明らかにすることが不可欠であり、また、そうしたデータに基づいて上述のような様々な可能性は検証される必要があると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、**th**-形の発達の第一段階であり、かつ、これまでのところ量的調査が不足している古英語期に焦点を当てて、**th**-形発達の要因と背景を調査・分析した。特に、当時の人称代名詞の使用と **they** が本来語であるとするならばその出自であると考えられている指示代名詞の使用の状況を観察し、その状況から以下の三点についてできるだけ明らかにしようとした。

- (a) 三人称複数形が従来の **h**-形から **th**-形に移行した要因は何か
- (b) **th**-形の発達を可能にした状況はどのようなものだったのか
- (c) 上記 2 点に関する方言や時代による違いはどのようなものであり、また、どの程度のものであったか

それぞれの研究内容の詳細は以下のとおりである。

(a) 古ノルド語からの借入語か内的発達か、その混合かについて考えるとともに、いずれにしても、それは従来言われているような必要に基づく (**need-based**) 変化なのか、必ずしもそうではない偶発的变化なのかを考えた。

(b) **th**-形の資料上の出現は ME からである。しかし、古ノルド語からとの接触はすでに古英語の時代から始まっており、古ノルド語借入語は数多く文献に現れる。借入による発達にしても内的発達にしても、代名詞のパラダイムの一部が変化することは大きな変化であり、何かしら前段階があったと予想されるので (Durkin, 2014)、その状況を考察した。特に、指示代名詞が人称代名詞に組み込まれていったならば、Werner (1991) が予想したように、指示代名詞と人称代名詞の意味・機能重複の度合いが高い時期があるはずである。この点も検証した。

(c) 先行研究でよく指摘されるように (e.g. 横田, 2012)、古ノルド語の影響が強い北部 (ノーサンブリア) と、その影響が弱い南部 (ウェスト・サクソン) や中部 (マーシア) では、**they** 型の発達をめぐる状況 (要因、進度など) は様々に異なると考えられる。また、同じ地域でも時代によって状況は異なることが予想される。そうした時代、方言の相違を資料から検証した。

3. 研究の方法

本研究においては、各テキストにおける人称代名詞と指示代名詞の使い分けの検証が最も重要な点であった。しかしながら、それぞれの語の分布、頻度等を調べるだけでは、どの程度用法に重複があったのかを見極めることは難しい。そこで、本研究では、古英語期のラテン語文献に記された行間注解を主に利用し、ラテン語代名詞とそれに対する古英語注の意味の対応を手掛かりとして、人称代名詞と指示代名詞の意味・機能の重複の度合いを検証した。資料としては、各テキストの校訂本と写本 (参考文献を参照)、電子資料 (Dictionary of Old English Corpus など) を併用した。

本研究では、表の 9 つの聖書行間注 (又は翻訳) の調査結果を用いた。翻訳文献を調査対象としたのは、できるだけ近い用法同士で比較するためである。注目したのは、ラテン語の *is, ille, ipse* の訳語である。ラテン語には三人称代名詞はなく、主に本来指示代名詞である当該三語がその役割を担う。ただし、この三語は *is<ille<ipse* の順に指示性が高くなる (Nunn, 1927)。

本研究の調査対象文献

方言	年代*	タイトル	略称
Northumbrian	c.950	the gloss to the Lindisfarne Gospels	<i>Li</i>
	c.950	Owun's gloss to the Rushworth Gospels	<i>Ru2</i>
	c.950	Durham Ritual (Only the <i>Temporale</i> , ff.1r-21r)	<i>RitGl</i>
Mercian	9c	the gloss to the Vespasian Psalter (Pss 1-50)	<i>PsGIA</i>
	c.950	Farman's gloss to the Rushworth Gospels	<i>RuI</i>
West Saxon	c.950	the gloss to the Royal (Regius) Psalter (Pss 1-50)	<i>PsGID</i>

c.1000	the West Saxon Gospels (CCCC 140)	<i>WSCp</i>
12c	the West Saxon Gospels (Oxford, Bodleian, Hatton 38)	<i>WSH</i>
c.1150	the gloss to the Eadwine's Canterbury Psalter (Pss 1-50)	<i>PsGIE</i>

*Morrell (1965), Brown *et al.* (1969), Kitson (2002) に基づく

上記文献における *is*, *ille*, *ipse* の訳語に関し、(1) 指示代名詞と人称代名詞の機能重複・使い分けの状況、(2) 人称代名詞複数与格の二形態 (*him*, *heom*) と指示代名詞複数与格 *þam* の分布状況、の二点を主に調査した。

4. 研究成果

4. 1 指示代名詞と人称代名詞の交替可能性

指示代名詞と人称代名詞の交替可能性については 2 つの注目すべき傾向が認められた。一つは、指示対象の数との関係である。デー人との接触があった地域のノーサンブリア方言のテキスト (*Li*, *Ru2*, *RitGl*) においては、他の方言のテキスト、特にウェスト・サクソン方言のテキスト (*PsGID*, *WSCp*, *WSH*, *PsGIE*) に比べ、指示代名詞の使用頻度が高く、とりわけ複数形になると指示代名詞を用いる比率が非常に高かった。なお、*Li* には、古ノルド語からの借入語が多く、また、その内容も、専門用語だけでなく、一般語も多く含まれていることが指摘されており、注解者は古ノルド語に通じていたと考えられる (Pons-Sanz, 2013)。その点からすると、人称代名詞と指示代名詞の使用においても一定程度転移があったことは十分に考えられる。

一方で、指示対象の有生性に目を向けると、ノーサンブリア方言だけではなく、マーシア方言やウェスト・サクソン方言のテキストにおいても、程度の大小はあるが同様の傾向が認められた。つまり、指示対象が無生の場合には、指示代名詞の使用の割合が顕著に高くなっていた。

以上の傾向は、古英語期において、どの方言に関しても、指示代名詞と三人称代名詞に一定の交替可能性があったこと、また、古ノルド語の影響の大小にかかわらず、*they* 型を受け入れる素地があったことが指摘された。

4. 2 複数与格形 *him* と *heom* の使用

この点については、前節の文献の内、*Li*, *PsGLA*, *Ru1*, *PsGID*, *WSCp*, *WSH* を用いて行った。その結果、*Li* では、単数、複数とも *him* のみを用いるが、マーシア方言とウェスト・サクソン方言の文献 (つまり *Li* 以外) では *heom* が用いられ、特に *Ru1*、*WSH* では複数での *heom* の使用はほぼ規則的であることが指摘された。

前節で述べた傾向と *heom* の分布を念頭に置くと、三人称代名詞の同音異義衝突の解消のため、ノーサンブリア方言とその他の方言では別々の解決策が取られた可能性が考えられた。つまり、ノーサンブリア方言では、指示代名詞の人称代名詞的使用 (と古ノルド語由来の語形の使用) が進み、結果的にそれが同音異義衝突回避、*they* 型の発達につながり、一方で、他の方言では、そうした変化は進まず、代わりに、与格複数形で *heom* を確立させたように、従来の *h*-型において人称代名詞の形態上の差別化が進んだのではないか、ということである。なお、*An Electronic Linguistic Atlas of Late Mediaeval English* (eLALME) で確認すると、後期中英語期に *hem* が中・南部で浸透・拡大している様子が窺えた。

以上のことから、*they* 型の発達が北部で始まり、南下するという流れの一方で、中・南部では、従来の *h*-型の中での変革が進み、それが拡大するという流れも認められ、この相反する流れの衝突・拮抗が *they* 型の浸透の遅さ、段階的進展につながったかもしれないということが指摘された。

4. 3 公表

以上の結果は、国内外の学会口頭発表と論文（Kozuka, 2019; 小塚, 2022; Kozuka, 印刷中）にて公表した。

引用文献

■論文等

- Baugh, Albert C and Thomas Cable (2002) *A History of the English Language* (5th ed.). London: Routledge.
- Brown, T.J. et al., eds. (1969) *The Durham Ritual: A Southern English Collectar of the Tenth Century with Northumbrian Additions, Durham Cathedral Library A. IV.19* (EEMF, v. 16), Rosenkilde and Bagger, Copenhagen.
- Campbell, A. (1959) *Old English Grammar*. Oxford: Clarendon Press.
- Durkin, Philip (2014) *Borrowed Words: A History of Loanwords in English*. Oxford: Oxford University Press.
- Förster, Max (1941) “Die spätae. deiktische Pronominalform *Þæze* und ne. *They*.” *Anglia Beiblatt* 52, 274-80.
- Förster, Max (1942) “Nochmals Ae. *Þæze*.” *Anglia Beiblatt* 53, 86-7.
- Howe, Stephen (1996) *The Personal Pronouns in the Germanic Languages: A Study of Personal Pronoun Morphology and Change in the Germanic Languages from the First Records to the Present Day*. Berlin: Walter de Gruyter.
- Kitson, Peter (2002) “Topography, Dialect, and the Relation of Old English Psalter-Glosses (I),” *English Studies* 83, 474-503.
- Kozuka, Yoshitaka (2019) “Reconsideration of the Development of English Third Person Plural Pronouns: An Analysis of the Use of Personal and Demonstrative Pronouns in OE Biblical Glosses,” in Michiko Ogura and Hans Sauer, eds., *Aspects of Medieval English Language and Literature*, Peter Lang, Frankfurt, 197-214.
- Kozuka, Yoshitaka (印刷中) “Interchangeability of Demonstrative and Third-person Pronouns in Old English: A Gateway to Modern English *they*?” *Studies in Modern English* 38.
- Lass, Roger (1992) “Phonology and morphology” in *The Cambridge History of the English Language*, vol. II (1066-1476), Norman Blake (ed.), 23-155. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lass, Roger (2006) “Phonology and morphology.” in *A History of the English Language*, Richard M. Hogg and David Denison (eds.), 43-108. Cambridge: Cambridge University Press.
- Morrell, Minnie Cate (1965) *A Manual of Old English Biblical Materials*, The University of Tennessee Press, Knoxville.
- Nunn, Henry P. V. (1927) *An Introduction to Ecclesiastical Latin*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ogura, Michiko (2001) “Late West Saxon Forms of the Demonstrative Pronouns as Native Prototypes of *They*.” *Notes & Queries* 48, 5-6.
- Pons-Sanz, Sara M. (2004) “A Sociolinguistic Approach to the Norse-derived Words in the Glosses to the Lindisfarne and Rushworth Gospels”, in: Christian Kay, Carole Hough & Irené Wotherspoon (eds.), *New perspectives on English Historical Linguistics: Selected Papers from 12 ICEHL, Glasgow, 21–26 August 2002, volume II: Lexis and Transmission*, 177-92. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Ritt, Nikolaus (2003) “The Spread of Scandinavian Third Person Plural Pronouns in English: Optimisation, Adaptation and Evolutionary Stability”, in: Dieter Kastovsky & Arthur Mettinger (eds.), *Language Contact in the History of English*, 2nd, revised edition, 279-304. Frankfurt am Main: Peter Lang.
- Sweet, Henry (1892) *A New English Grammar: Logical and historical*. Part. I. Oxford: Oxford University Press. (東京：名著普及会, 1983).
- Werner, Otmar (1991) “The Incorporation of Old Norse pronouns into Middle English: Suppletion by Loan”, in: P. Sture Ureland & George Broderick (eds.), *Language Contact in the British Isles: Proceedings of the Eighth International Symposium on Language Contact in Europe, Douglas, Isle of Man, 1988*, 369-401. Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- 横田由美 (2012) 『ヴァイキングのイングランド定住：その歴史と英語への影響』 神奈川：現代図書.
- 小塚良孝 (2022) 「古英語における *him, heom, þam* の分布—*they* 型の漸進的発達との関わり—」 『外国語研究』 55, 219 - 230. 愛知教育大学外国語外国文学研究会.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yoshitaka Kozuka	4. 巻 38
2. 論文標題 Interchangeability of Demonstrative and Third-person Pronouns in Old English: A Gateway to Modern English they?	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Studies in Modern English	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小塚良孝	4. 巻 55
2. 論文標題 古英語におけるhim, heom, tam の分布 they 型の漸進的発達との関わり	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 外国語研究	6. 最初と最後の頁 219-230
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 小塚良孝
2. 発表標題 後期古英語における三人称代名詞と指示代名詞の境界 theyの発達との関わり
3. 学会等名 日本英文学会中部支部
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshitaka Kozuka
2. 発表標題 The interchangeability of the demonstrative pronouns and the third-person pronouns in Old English
3. 学会等名 The History of English Language in Poznan biannual conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小塚良孝
2. 発表標題 古英語におけるhim, heom, þamの分布とthey型発達の一側面
3. 学会等名 名古屋大学英文学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Michiko Ogura et al.	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Peter Lang	5. 総ページ数 340
3. 書名 Aspects of Medieval English Language and Literature	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------